



ピクタインダオン

(おきみがりにぼし)

第12号

発行日 2018年2月1日

発行人 矢代 しづ

秋田市御野塩7-1-29-305

障子

わたしは黄ばんだ障子です

糊ははがれ くすんだ顔をしています

すきま風が鳴らす

紙のカスタネットを聴いています

棧には悲しみの澱が沈んでいます

部屋は ほの暗く

ハンガールの背広にも

色の翳りがみえます

ある秋日和に

立ちこめた負の気配が払われ

部屋がしだいに明るんできました

乳白色の光がからだを透かし

花模様を浮きあがらせませす

わたしは生まれかわった清い障子です

濁黒 (KURO) I

どこも動かない
意思表示ができない

機能する聴覚で

わたしは聞いた

聞き覚えのある声を

権力におもねる者たちのタール状の声を

長いあいだ

わたしは床にころがったままだった

十字を刻んだ四角い箱の車は

すぐには呼ばれなかった

やがて

搬送された

あかく灯る入口で

検体は！

と危機にすばやく対処する医師の

声高に叫ぶ声を聞いた

あの日

いつもとかわらぬ

水の流れるような静けさの

朝を迎えていた

突然

墜落してくる飛行機のように

わたしに襲いかかった災難

職場の異臭

(助けて……)

床のうえへ倒れこむ

黙りこむ躰

一本の丸太と化したわたしは

声が出ない

丸太ん棒の躰の上を

あおじろい声が

交差する

*

死神が

近づいてくる

このことは いいな……

だれにも……

よごれた声が

たましいを射る

執拗につきまとう声に

侵食されて

心の陸地に傷痕ができる

声は朝に 昼に

そしてまた夜に射ってくる

わたしは声の中毒になる

毒声は

たましいを引き裂きつつける

*

アクマが

ことばを煙のように吐くとき

黒い翳が

わたしの背後から伸びる

翳の千の手は

迷わず、見事に、たしかに

わたしを翳のなかに引きずりこんだ

いまわしいもの前で

わたしは無力な置物でしかなかった

*

大きく傾斜していく

クリノメーターでは測りきれない

こころの断層

真っ黒な姿のデーモンに

真実が葬られる

わたしが見た

不条理

わたしは苦界を転がっていった

*

どんなにしても消え去ることのない
蒼ざめた朝の記憶

*

死んだわたしが

積みかさなつて

土塊となつて堆積している

泥炭地

*

日常が

どんどん昏くなり

巡る季節とは無縁の

石の時間が

わたしを刻んでいく

*

きょうも

全身に

赤い薔薇が咲く

隆起の丘は

嘆きの色で燃えさかる

搔いて搔いて搔いて搔いて搔いて搔いて搔いて搔いて

搔いた皮膚の裂け目から

鮮血がにじみ出る

きょうも

また

二〇本の手足の先端に

激痛が走る

魂に止めを刺す

電気ショックのような拷問

*

箸も持てなくなった

痺れる手は

食べる本能さえも遠ざけ

毎食手をつけないままのお膳を

配膳台に戻していた

そんなある日

病院の廊下で

オレンジの点滴袋をぶら下げた男性に

呼び止められた

(あんただったのか

わたしは食べたくても食べれないんだ
白い清潔な声は

食事を摂らなかつた食器の主を

心配していた

不意をつかれた脆弱な意志は

すばやく

視線をそらすしかなかった

毎食

煩悶が喉につかえ

食べられるのに食べれない

食べないことで証明する

みずからの傷

光の窓

まつすぐにつづくケヤキ並木

水あさぎ色の空は

高圧線で分断されて

綸子りんずの帯のよう

ケヤキは秋の影を

路上に走らせている

秋は

どんなかたちにもなる

鉄塔を囲む柵は

シマウマ模様の影を

遊ばせている

ポンポンダリアは

右肩上がりのシーソー

駐車場には

半円の黒い塊

地面を這う

のつぺらぼうのように

地面にはりついている

店の幟は

光をはらみ

またたいている

濃みどりの

首を伸ばした電柱の影に

身ぶるいをするシバたち

歩道には

家並みの落とす影が

沈黙のままに

横たわっている

前方に

昏い闇をくり抜いたような

明るく四角いかたちの

光の窓

歩道にできた

窓辺で

わたしは

秋の陽を

両掌でうけとめた

叔父

母についで

兄を亡くした

こころの襷に

悼みが容赦なく叩きつけたとき

わたしは詩を書かずにはいられなかった

(詩を書いてくれ

その詩をみた叔父が

かなしい顔をして懇願する

(それは できないよ！

日ごと

叔父の身体から

生命いのちの欠片が剥がれ落ちていく

お金持ちの叔父も

いまは歩くことも

排泄もできなくなり

わずかな食事で

やっと今日をつなぎ止めている

膨れあがった死から逃れるかのように

そつと枕に顔を沈めた叔父の

細い頸筋がふかく黄昏れている

叔父は幼少時に母親を亡くし

姉であるわたしの母は育ての親でもあった

(農家に学問はいらない！

苦学した叔父

公務員の叔父は時折

姪のわたしたちに予想外の小遣いをくれた

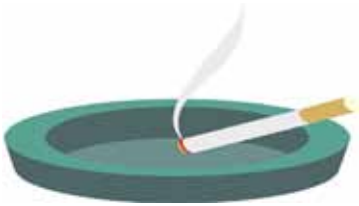
母への恩返しだったのだろうか――

いま 彼岸の母は

どんなにか叔父を案じていることだろう

(詩を書いてくれ
かなしい叔父は
夢のなかでも懇願する

*叔父は、昨年十一月に逝去



徒然のエチュード X

1

本年も昨年にまして

差し入れは生肉で

よろしくお願いいたします

山野
熊

2

雉打ちに行ってくる

と男子

花を摘みに行く

と女子

なんとエレガントな山の隠語

3

雪は音をけす

どおりでテレビの音量が高い

と感じるわけだ

4

悩む

わたしがいる

悩むのにも

才能がいるという

悩んでいるわたし

すごい！

5

ネタは小さく

シヤリは多い

腹一杯の田舎鮓

6

幼いころのわたしは

母のエプロンをつかんで離れない

ひつつき虫^{*1}だった

どらんこ^{*1}

と笑われても

平気だった

バッチ^{*2}のわたしは

甘えん坊

*1 胴乱、の意

*2 末っ子、の意

7

野菜の種まきは

自分の都合にあわせてはダメ

時期をみてまくと

機嫌よく育つ

8

成長期の孫の誕生日に

運動靴をプレゼント

三ヶ月後には用なしに――

金がかかるクラブ活動！

9

流れ星が集まって

地球という星が誕生した

人間の先祖は

流れ星

と自慢するのは

だれ？

【あとがき】

二〇〇二年春の忌まわしい事故からようやく立ち直ったものの（まだ完治してはいない）、後遺症として、痺れや目眩、脱力などを余儀なくされたわたしにとつて、心をつなぐ糸が詩であった。

困難な後遺症とはいっても、目には見えないだけに、他者には分かってももらえない切なさもあった。

そんなとき、『海市』へよせた「黒」がきっかけとなって、針のめどほどのあわい光が射しこんできたのだった。

厭な記憶に蓋をすることで、なんとか穏やかさを保ってきたわたしが、いまここで閉じた蓋を

こじ開けることは、再び深い闇に落ちることもある。苦悩と悲しみに襲われながらの詩作は、心底しんどい。しかし、詩との邂逅を考えたとき、感謝に似た気持ちになるのである。

十六年間のわたしの、日々のたたかきを書き進めることで、漆黒の闇に落ちこむのか、明るく肯定的な生活へ進めるのかは、分からない。

「たたかき」を、うまく対象化できない部分もあるが、今年は、「濁黒」に傾注していきたいと考えている。

*

次回のピッタの会は、四月に若木由紀夫氏を講師に予定しております。

